



※「おはなし定期便」は、子どもたちへの「読み聞かせ」や「朝の読書」の時間などに活用ください。

メアリーさんのドーナツ・クイズ

二宮由紀子

その朝、めんどりのメアリーさんがドーナツ屋さんにはいつて、「チョコレートドーナツと、ホットミルクを」と注文したとたん、あたまの上でがらんがらんと大きなかねの音がなりました。

「おめでとうございます、メアリーさん。あなたはわたくしたちの店の二万人めのお客さまです」

目の前の店員さんがそうさげぶと、ならんでいたほかの店員さんたちも、ばちばちといつせいに拍手します。

「まあ……わたしが……？」

「そうですとも。はい、どうぞ。二万人めのお客さまへの記念品です」と、店員さんはメアリーさんに、大きなリボンのついた白い箱をわたしました。

店の中にいたほかのお客さんたちも、

「おめでとう」

「おめでとうございます、メアリーさん」と、メアリーさんにむかつて、ばちばちといつせいに拍手します。

メアリーさんは、赤くなりながら、

「まあ、ありがとうございます。ええと、箱にはなにがはいっているのかしら？」

と聞きました。

ドーナツのつめあわせセットだといいなと期待しながら聞いたのですが、

「わたくしたちの店の特製紙ナプキンのつめあわせセットでございます」

というのが、にこにこした店員さんの答えでした。

「……ああ……あら、そう……そ……それは……ありがとうございます……うれしいわ……」

メアリーさんは、がっかりしたのをかくして言いました。

すると、店員さんは、もつとにこにこして

「はい。そして、じつは、わたくしたちの店からのプレゼントはこれだけではございません。もうひとつ、もつとすばらしいプレゼントがあります」

と、言いましたので、

「まあ、なにかしら？」

メアリーさんは、顔をかがやかせました。

もしかしたら、一年間ドーナツ無料食べほうだい券とか、それとも、もしかしたら、十年間ドーナツ無料食べほうだい券かもしれません。それなら、ただのドーナツつめあわせセットよりも

もつともつとすばらしいではありませんか。

店員さんは、にっこりすると、胸をはつてこう言いました。

「はい。では、メアリーさん、あなたにはこれから二万人めのお客さまだけのビッグチャンスとして、ドーナツ・クイズに答えていただきます。ドーナツ・クイズの三問全部に正解すると、なんとハワイ旅行にご招待！」

また、ばちばちとほかの店員さんたちが拍手しました。

店のお客さんたちは

「いいわねえ」

「でもメアリーさん、答えられるかしら？」

とささやきあつています。

「まあ」

メアリーさんは、きゆうに胸がどきどきしてきました。

「こんなことになるんだったら、ちゃんと勉強してから、ドーナツ屋さんに来るんだったわ」

と思いました、もう勉強するには間にあいません。

「ではさっそく、第一問」

と店員さんは言いました。

「ドーナツという名前は『どうなってるの？』という意味からつけられた名前である。マルか、バツか？」

「……え、ええと……バツ……？」

メアリーさんは答えました。あんまりはつきりと自信はないけれど、そんな意味ではなかった気がします。

すると、

「バツ！ メアリーさん、正解です！」

ばちばちと店員さんたち全員と、お客さんたち全員がいつせいに拍手しました。

「よかった」

メアリーさんは胸をなでおろしましたが、



にしむら かせ／絵



「さあ、では、つづいて第二問です。ドーナツのあなは、もともと、自動車のタイヤのあなに似せてつくられたものである。マルか、バツか？」

「……え、ええつと……」

メアリーさんは、まよいました。

目の前のガラスケースの中でならんでいるドーナツに答えを聞いてみようかと思いましたが、そんなカンニングみたいなまねはできないし、だいたい、聞いたところでドーナツが答えてくれるかどうかかわかりません。

「それに、ドーナツたち自身も、そんな昔のこと、知らないかもしれないしね。じゃあ、もう、あてずっぽで答えるわ。バツ！」

ぜんぜん自信はなかったのですが、

「バツ！ メアリーさん、正解です！」

店員さんたち全員と、お客さんたち全員がまた、ばちばちぱちといっせいに拍手しました。

「メアリーさん、すごいですね。あと二問正解したら、ハワイ旅行ですよ。いま、どんなお気持ちですか？」

「ええと、ええと……油の中で揚げられてるような気持ち」

メアリーさんは答えました。

だんだん、ドーナツの気持ちかわかってきたような気がしてきます。これなら、ハワイ旅行もまちがいないかもしれません。

それで、

「さあ、では、メアリーさん、いよいよ、最後の問題です」

と、店員さんが言ったときには、

「はい、いいですよ」

と、メアリーさんは、にこにこして答えていました。

あたまの中にはハワイの明るい太陽がかがやいています。青い海に白いすなはま。新しいビギニの水着を着てストローでパイナップルジュースを飲むメアリーさん。

「ほほう、メアリーさん、自信たっぷりですね。それでは、最後の問題です」

と、店員さんはおごそかに言いました。

「ドーナツがはじめてつくられたのはハワイである。マルか、バツか？」

「マル！」

メアリーさんはすぐ言いました。パイナップルジュースを飲みながら、海岸でドーナツを食べるのは、とってもぴったりのことなからです。

なのに、

「ぶつ、ぶつ、ぶぶー！ 正解はバツ。メアリーさん、不正解です！」

店員さんは言いました。

「さんねんでしたね、メアリーさん。あと二問だったのに」

「……あ……ええ……はい……」

とうなだれてがつくり肩を落としたメアリーさんに、店員さんは明るい声で、こう言いました。

「でも、がっかりしないで、メアリーさん。ハワイ旅行はだめだったけど、はい、こちらをどうぞ」

「まあ、なにかしら？」

メアリーさんが身をのりだすと、店員さんはいこにこしながら、言いました。

「はい、ご注文のチョコレートドーナツとホットミルクでございます」というわけで、このおはなしはこれでおしまい。



二宮 由紀子（にのみや ゆきこ）

童話作家、翻訳家。一九五五年大阪府生まれ。「ハリエズミのフルフル」シリーズ（文芸堂）で、赤い鳥文学賞受賞。めんとりのメアリーさんシリーズ「ホットケーキいん？」「アイスクリームこっちゃん」（ポプラ社）など、著書多数。